

キェルケゴールの書簡*1

—その 2—

訳：谷塚 巖

T113 (Brev 25)

ハンス・ペーター・キェルケゴール宛の書簡（日付なし、1843-44年推定）

親愛なるペーター*2！

昨日、あなたの訪問が無駄な回になったことが、私には残念でなりません。あなたと話をしながら少しばかりの時間を過ごすことは、私にとって喜ばしかったことでしょう。しかしだからといって、私をあきらめないでください。私について考えることや、私を訪問することについて考えることも。反復を信じてください。——いや、私はいかなる反復も存在しないことを証明したのでした。しかし、それだからこそ反復について疑い、もう一度、訪ねてきてほし

*1 書簡の分類番号（略号 T）は、旧『キェルケゴール研究』が底本としていた、ニールス・トゥルストロブ編『セーレン・キェルケゴールに関する手紙と文書』（*Breve og Aktstykker vedrørende Søren Kierkegaard*, udgivne paa Foranledning af Søren Kierkegaard Selskabet ved Niels Thulstrup, bd. I, Kbh. 1953）による。本稿の翻訳の底本には、校訂版キェルケゴール全集のオンライン版を用いる。*Søren Kierkegaards Skrifter*, bd. 1-28, udg. af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Anne Mette Hansen og Johnny Kondrup, Søren Kierkegaard Forskningscenteret og Gads Forlag, København, 1997-2013 (<http://SKS.dk/forside/indhold.asp>)。出典箇所は、慣例に従って、校訂版全集の略記号 SKS、巻数、頁数を括弧内に示すことにする。脚注には、校訂版全集の注釈に基づく人物などの基本情報のみを記載する。

*2 Hans Peter Kierkegaard, 1815-62。ペーターは、ミカエル・アナセン・キェルケゴール（Michael Andersen Kierkegaard, 1776-1867）の息子。ミカエル・アナセン・キェルケゴールは、セーアンの祖父の兄弟（Anders Christensen Kierkegaard）の息子にあたる人物。したがって、この書簡の宛先であるペーターは、セーアンのまたいとこにあたる。

いのです。反復は、ここでもまさに、二度目も無駄に終わってしまうはずだ、ということであるかもしれません。そして、いかなる反復も存在しないのです（『反復』を参照）——つまり今度こそ、あなたは私に会うだろうというあらゆる人間的な蓋然性が存在します。

あたなの親愛なるいとこ

S. K.

(SKS 28, 47)

T114 (Brev 26)

ハンス・ペーター・キェルケゴール宛の書簡（日付なし、1844-48年推定）

親愛なるいとこへ！

私の言葉が、私があなたのことについて考えていることをあなたに確信させるように。——そうすれば、これらの言葉は、何らかのことをなし遂げます。これらの言葉を、一つの訪問と見なしてください。——ある小さな手紙は、私の言葉において、他者の言葉への訪問と同じものなのです。

ですから、また来てくださいますか。あなたが乗ってくるのを無駄にするようなことはしたくありません。そうならないように、あなたは使いを寄こして、私がお家にいるかどうかを尋ねに来させることもできるのではないのでしょうか。道はそれほど遠くはないのですから。もしあなたがよければ、おそらく午後5時から6時の間にお会いすることができますが。

あなたのいとこより

S. K.

(SKS 28, 47)

T115 (Brev 12)

ペーター・クリスチャン・キェルケゴール宛の書簡（1845年1月17日付の押印）

親愛なるペーター*3！

アテネウム*4の司書が、返却されていない貸し出されたままの本の証書を見つけたそうです。署名には、キェルケゴールとあり、私にははっきりと解読できない何らかの名前がそれに伴っています。司書は、この名を持つ会員複数名に問い合わせたそうです。しかし、誰もその問い合わせについて知りませんでした。そしてついに、最後の一人として、私に連絡してきました。彼は、私がそこで一度も本を借りたことがないことをわかってはいたのですが、それでも私に連絡してきたのは、私の名で借りてもよいと私が許可した者が、もしかすると誰がいるかもしれないと思ったからなのでしょう。私はそのことについて思い返してみましたが、誰も思い当たりませんでした。署名も私のものではありません。もし私の思い違いでなければ、ハーン*5の家族が、あなたの名で、アテネウムで借りていたかもしれません。そうではないでしょうか。本の題名は、グラッタン*6著『マンスフィールドの伯爵たち』*7です。

司書が、あなたに手紙を書くように私を仕向けました。だからあなたに書いています、あななのすべての健勝を願いながら。また、こうしたすべての駄弁が、それらがそこからやってくるブロッケン山にとどまっていますように。

あなたの
弟より

宛先

キェルケゴール牧師博士

*3 Peter Christian Kierkegaard, 1805-88. セーアンの兄。

*4 1824年にアテネウム読書協会が設立され、会員には、図書室の利用や本の貸し出しが許されていた。

*5 Johan Gottfred Vilhelm Hahn, 1804-40. 市民道徳学校で、ペーターと同級生であった人物とされる。

*6 Thomas Colley Grattan, 1794/96-1864.

*7 “Greverne af Mansfeldt”

ペーダースボウ
前払 ソーウェー行き

(SKS 28, 29-30)

T116 (Brev 13)

ペーター・クリスチャン・キェルケゴール宛の書簡（日付なし、1845年12月10日あるいは11日推定）

45年危機のもとで

親愛なるペーター！

風聞は私の特別の注意の欲求でもなければ対象でもありません。特にそれらが私に関わっている場合は。しかしながら、今回は、風聞はあなたに関わっています。監督*⁸が、あなたがしばらくのあいだ考えるときを持ち、洗礼を受けるか、——あるいはまさに公職を辞すかを定めるべきであるという勧告を行ったそうですね*⁹。

事態の成り行きを心配していることは言うまでもありません。私は、極端なところまでには至らないと信じています。もしあなたが当事者でなければ、私はこう言ったことでしょう。行くところまで行って、監督が勝利してくればよいのにと。今、私はこのことを望むところから遠く隔たっています。とはいえ、あなたは、私がどれほど監督を支持しているのかも知っていることでしょう。では、事態がこの極端にまで達したと考えてみましょう。それでいったいどうなるというのでしょうか？私が動こうとするとき、賛成や反対によって——私自身がそれを余計なまで得てしまう人間なのですが——介入されることを私自身が望まないのと同様に、私は、行為者に介入することを望んでいます。あなたこそ、この問題について一番考え、選択したのでしょうか。ですか

*⁸ Jakob Peter Mynster, 1775-1854. 1834年にシェラン教区の監督として叙任され、デンマーク国教会の監督の地位に就く。

*⁹ 幼児洗礼を拒否するバプテスト派の意向に絡む問題。ペーターは、幼児洗礼の強要も辞さない国教会の方針に反対であった。

ら、ただ一つのことだけ私は思い起こしたいと思います。それは、私の記憶ちがいであれば、前回、決断が戸口のすぐ前に立っていたように思われたときにも言ったことです。どこでもそうであるように、ここでも当然、関与するのがふさわしくないのに、おしゃべりすることに長じようとし、そして、もしあなたが極端なことをあえてなせば、当然、そこから長期にわたって生活の糧を得ようとし、あなたを引き合いに出そうとし、声高になろうとする等々の、おしゃべり好きの一群が存在するというを心に留めておいてください。たとえば、あなたがそのもっとも正直な確信に従ってなすことが、あなたがなす最善のこと、われわれの時代においては釣り合わない唯一の正しいことであっても、卑怯、おしゃべりへの欲求、力のない反抗、それに駄弁や駄弁、等々、がそのことに結びつき、そのようにして、最善のことが被害を受けるということをつねに恐れなければなりません。このような考えが、ある人を思いとどまらせるべきであるとは思いますが、このような考えは、助言として受け止められるべきであると思います。時代が定まり、安定していたのであれば、もっとうまくいったかもしれません。しかし、改革者としての召命を受けているという固定観念を持つにすぎない世代、あるいは、誰も召命を受けていないのに、改革者になろうとすることに召されている（ああ、何という矛盾でしょうか！）と妄想しているような世代、そのような世代とは注意深く付き合わなければなりません。しかし、すでに言ったように、監督はあえて押し通さないと思います。そのことを私はあなたのために喜びます。そしてただ気の毒でしかないのは、この国でもっとも精力的な人間の一人が、愚かな者たちによって指をさされることになる、ということです。というのも、このことは排除されないからです。

私が隠し立てなく話していることはあなたにおわかりでしょう。たしかに、あなたにとっては、私のミュンスターへの熱意が、こうしてまったく冷めることになるのかどうか疑わしいかもしれません。またそれは、根本において、あなたに対する私の関心に、悲しい光を投げかけるかもしれません。というのも、風見鶏の関心というものは、注意を向けるべきものではまったくないからです。私はあなた方二人を支持しています。いつものように。あなた方が、お

互いに一度たりとも対立しなければ、どれほど望ましかったことでしょう。

あなたも十分に知っているとおおり、私の人生は、数々の決断のなかにあります。私の心臓はそこで鼓動し、私の兄弟としての献身も、そこであなたに表明する機会と欲求とを見いだすのです。どうかこのことを確信してください。

あなたの兄弟より

S. K.

牧師博士 P・キェルケゴール

前払 ソーウェー行き

(SKS 28, 30-31)

T117 (Brev 14)

ペーター・クリスチャン・キェルケゴール宛の書簡（1845年2月18日付）

親愛なるペーター！

2月18日

あなたの手紙を受け取り——燃やしました。同封された手紙の内容は、私があなたに書いたときには、私にとって既知であったと信じています。私の情報源は、たしかに、うわさされていたものでしたが、翌日には信頼できる情報ということがわかりました。私が同情していることをあなたに確信してほしいと願ったちょうど同じときに、私があのように率直にM監督への同情を打ち明けたのは、あなたが推し量ってくれるものと思ってのことでした。私からの手紙が——私はそのことに関してそのなかで何もほのめかさなかったのですが——あなたの疑念を呼び起こしたかもしれません。監督が大法官をみずからの側につけるだろうということは私もよくわかっていました。しかし、そこから何が結果するのでしょうか？それで決着がつくのでしょうか？それどころか、まさに、決定的な前進が、後ろに退いてしまうのではないでしょう

か？彼は、あなたがあなたの人生を可能なかぎり高く売ろうとするまで、そうしてそれを極限に至らせるまで、待てないというのでしょうか？それでどうなるのでしょうか？あなたは免職されることになります。しかし、監督も大法官もそれを決定することはできません。こうして、事態は国王のところに行くことになるのです。事態が、あなたと監督との間から、大法官との間にまで及んだとき、あなたはあきらめるべきだというのが私の意見であったなどと、あなたは思っていなかったでしょうか。そのようなことは決してありませんでした。しかしまさにそのために、事態は先に進んでいないのであり、監督は押し通さずにそれを収束させるだろうという私の意見も変わりません。もし、監督に分配が上がると私が思っていたのであれば、私はこのようには打ち明けなかったでしょう。それは、私の考えも及ばないことなのです。

私が急いで書いていることを、あなたはわかっていると思います。ほかの場合に私がどれほど怠惰であっても、危険が存在するとき、私の失敗が後ずさりすることにはではなく失望させることにあるかぎり、私の献身はこうしてそれみずから急ぎ立てられ、危険と共にのみ増していくのです。

あなたの弟より

S. K.

イエッテ*¹⁰はどうしていますか？あなた自身がよくわかっていることにちがいはありませんが、決定は未だ完全には下されていないということに、固く踏みとどまってください。危険はまだやってこないうちに、あまりにも早く彼女の前で辞職という究極のことを述べてしまって、彼女をやつれさせないようにしてください。彼女とポール*¹¹によろしく伝えてください。最終的にはポールが、家族の名前の永遠にわたる記憶を、あなたが人びとと分け合うような名誉や、私の著作をひっくるめたものよりも、よく守ってくれることになるでしょう。

*¹⁰ Sophie Henriette Kierkegaard, f. Glahn, 1809-81. ペーターの妻。イエッテという愛称で呼ばれていた。

*¹¹ Pascal Michael Poul Egede Kierkegaard, 1842-1915. ペーターとイエッテとの間に生まれた一人息子。

宛先

牧師博士 キェルケゴール

ペーダースボウ

前払 ソーウェー行き

(SKS 28, 32) -33)

T118 (Brev 15)

ペーター・クリスチャン・キェルケゴール宛 (1845年3月10日)

親愛なるペーター！

3月10日

2月27日付のあなたの手紙をたしかに受け取りました。今回は、返事を急がないことにしました。というのも、事態全体は、今や、それ自体にとっての日々、生命、陸路等をもつと思われるからです。ここ、この都市で起こったこと、すなわち、協議会のさらなる後退、監督と大法官のさらなる前進、先日行われたエミール・クラウセンと監督との間の会談について、私が無知ではなかったことは自明でしょう。あなたも、そのようなことはすべて知っていることと思います。ところで、監督の大法官への歩み寄りに関する私の最初の情報ですが、そのとき、私は本当に厳密な意味で、実情に即していました。私は、その同じ日の午後、ある人から——この人は、誇張する傾向がなくはないのですが——、あるいはより正確には、この人から聞いた人から聞いていたのです。そのような種類のことは、たいていは書きません。翌日、私はその人と話をしました。彼は、同じことを私に話したのですが、私はそのような情報をもとにして書いたわけではありません。三日後に、私は自分の情報源を得ました。それは信頼できるものでした。私が書いたのは、四日目だったと思います。この事態において、とても性急に取り決められたものがあつたことは、あとになってからのみ驚きえますが、事前に知られうるものではありません。あなたには報告してくれる人がいるものと推測します。私は、時間の都合がつけ

られないのです。しかし私も少しは追っています。部分的なことを指摘するとすれば、監督が少し前進したことは否定しません。というのも、彼の活動力は一人や二人に影響を及ぼさずにはいなかったはずですから。しかし、これは決定的なことではないということに、私たちはたしかに同意したのでした。どうかお元気でいてください。イエッテによろしく。ポールと遊んであげてください。そして、彼に、一度もと言ってよいほど会ったことがない叔父への善意と敬意とを刻印してください。

あなたの

S. K.

(SKS 28, 33-34)

T119 (Brev 221)

ビアンコ・ルノ宛の書簡（1845年5月10日付）

拝啓

私は、出版業者のフィリップセン*¹²氏に、私の教化的講話の在庫を売り払いました。つきましては、あなたのもとに残っている部数を届ける彼からの要請を快諾していただけますでしょうか。

1845年5月10日

印刷業者ビアンコ・ルノ*¹³殿

敬具

S・キェルケゴール

(SKS 28, 340)

*¹² Philip Gerson Philipsen, 1812-77.

*¹³ Christian Peter Bianco Luno, 1795-1852.

T120 (Brev 179)

アンナ・ヘンリエッテ・ルン宛の書簡（1845年、日付なし）

私の親愛なるイエッテ*¹⁴！

たしかに私は、あのこざっぱりさんが、いともこざっぱりと自分を表現しているように、「その年の最初の日の、最初の人」等々となるには遅すぎたかもしれない。しかしその一方で、あまりにも遅く来すぎたので、戸が閉められていたとは思いたくありません。

私は、あらゆる善き意図にもかかわらず、いつものようにあなたの誕生日を忘れてしまったのです。慰めようはありませんでした。私は、あなたからの心付けのあの「慰め」*¹⁵に、むなしく自分の頭を置いてみましたが、無駄でした。いや、しかしそれは無駄ではありませんでした。突然、「お前は返礼をしなければならぬ」という考えに、私は慰めを見いだしたのです。一緒に送った小包もまた、「慰め」です。しかし、それは頭の下に置くためのものではありません。そのためには硬すぎます。しかしその中身は、あらゆる種類の人生の境遇において慰めのためになるでしょう。そして、あなたがおそらくはそうであるように、もし、ひとがいかなる慰めも必要としないほどに幸運であるならば、それはさらに、贅沢品となることでしょう。なんという慰めでしょうか。慰めが贅沢品であるというのは。ですから、「小瓶に」慰めを求めないでください（もしあなたがそれを求めるのであれば、無駄にはならないでしょうが——とはいえ、もし私が、フランソワ・マリエ・ファリナ*¹⁶の後で、彼のオーデコロンを称揚しようとするならば、それは、ホメロスの後で、イーリアスを書くことであるかもしれません）。そうではなく、歯痛や頭痛などによって苦しむくらいなら、享楽や快樂のために、すこやかにそしてきよらかにその中身

*¹⁴ Anna Henriette Lund, 1829-1909. セーアンの姪。実姉の Petrea Severine Lund, f. Kierkegaard (1801-34) とその夫 Henrik Ferdinand Lund (1803-75) との間に生まれた娘。

*¹⁵ 枕のこと。

*¹⁶ Giovanni Maria Farina, 1685-1766.

を浪費して、そのあり余るものでみずから楽しんでください。

一方で、あなたが浪費するべきではないのは、あなた自身が、いずれ少し節約して扱うことを知るようになるものだと思いますが、それは、私があなたにどれほど豊富に分けようと思っても、浪費しようがないものです。すなわち、それは、あなたに対する善き願い、よく配慮された願いです、私の愛するイエツテ。私たちはめったに会いません。それなのに私たちが会うとき、私は、あなたを少しからかったりします。しかし、あなたの誕生日にこそ、私はあなたに対するいろいろな善き願いの中から、ささやかな調度品を、あなたとあなたの未来への思いやりの保証を、あなたの家に供したいと願っていたのです。私はいつも思っています。あなたにはそれを要求し、またそれを探し求める権利が公平に与えられているのです、

あなたの叔父から、そしてあなたの叔父のもとにおいて。

(SKS 28, 292-293)

T121 (Brev 53)

P・L・ミュラー宛の書簡（1845年12月25日、27日付）

コペンハーゲン 1845年12月27日

数日前、キェルケゴール修士が、彼の不在時に、彼の住所に配達された封書を——それは、ウイクトル・エレミタ^{*17}に宛てられていたのですが——、私に送ってきました。私はただちに、名宛人にその手紙を転送し、そして、私はこの名宛人から、手紙を受け取りました。彼はそこで、あなたに、写しを送るようにと私に頼んでいます。その写しは以下のとおりです。

敬具

J・F・ギョズヴァ^{*18}

^{*17} ウィクトル・エレミタ (Victor Eremita) は、『あれかーこれか』(1843年)の刊行者。キェルケゴールの仮名の一人。

^{*18} Jens Finsteen Giødward, 1811-91. 法律家にしてジャーナリスト。『コペンハーゲン・ポスト』紙や『祖国』紙の共同編集委員を歴任。『あれかーこれか』の校正も担当

S.T.

P・L・ミュラー*¹⁹殿

写し

拝啓！

降誕祭第一聖日

今日、私はギョズヴァ氏を介して、あなたの、とても敬意に満ちた内密の手紙を受け取りました。私の返事は、この方向において私に提案し、あるいは提案してきた、他のどの人に対してもそうであるように、あなたに対しても次のようになるでしょう。すなわち、私は決して、いくらかでも終えたことはなく、また、私はどんな約束にも、決して自分を拘束しません。

敬具

ウィクトル・エレミタ

(SKS 28, 89-90)

T122 (Brev 216)

イスラエル・レヴィン宛の書簡（日付なし、1845年3月～4月頃推定）

月曜日

私が言っているように、あなたは失われた文献学者であり、そうであり続けるのではないのでしょうか。筆記体を読むことすらできなくなったとは——暗がりにおいて。この脆弱性は、あなたにとっては許されても、「筆記体を読む」ために要求される光に、あなたが配慮しなかったことは許されません。ともかく、午後三時半に来てください。

した。キェルケゴールの友人の一人。

*¹⁹ Peder Ludvig Møller, 1814-65. 美学者、著述家、批評家として知られる。美学年間『大地』(1845-47)を刊行。風刺週刊誌『コルサー』に一連の記事も寄稿。キェルケゴールの論争相手の一人。

S・キェルケゴール

宛先

博士候補 I・レヴィン^{*20}殿

(SKS 28, 337)

T123 (Brev 213)

イスラエル・レヴィン宛の書簡（日付なし、1845年2月～3月頃推定）

私の善良なるレヴィン

これはどうしても無理です。私は、私自身のためにも、習字帳のために書くには年を取りすぎています。また、たとえ私の筆記体が、学んでいる若者にとって練習課題として参考に値するとしても、草稿のために草稿を書くことは、私には合いません。そのような草稿は、容易に、取り散らかしたものになりかねません。

敬具

S・キェルケゴール

少し前に、あなたは、ある短い手紙の中で、私の教化的講話を求めています。私が返事をしなかったのは、私の無礼や陰悪からではなく、返事を送らなかったということを忘れていたからです。というのも、それは準備し終わっていて、その日以来、取り置かれたままだったからです。散らかった書類の中に探しものをしていて、それが今日見つかりました。ここにそれを送ります。現在のこの手紙に続くものとして、それはあまり幸運には見えないかもしれませんが。私は、すぐにまた否と言わなければならなかったことを、待たなかったのです。そうでなければ、何でもはいはいと聞く私なのですが。

^{*20} Israel Salomon Levin, 1810-83. 文献学者。キェルケゴールの秘書を務めた（1844-51年）

宛先

博士候補 I・レヴィン殿

小包と共に

ファーウェゲーゼン142 1階

(SKS 28, 334-335)

T124 (Brev 214)

イスラエル・レヴィン宛の書簡（日付なし、1845年2月～3月頃推定）

日曜日

私の善良なるレヴィン！

私の蔵書のなかにある他のどの本も、なたたの思うままにできるように、また、あなたの言語学的な恋がまったく思うままにできるように、私は喜んであなたに送るべきでしょう。あなたでなければ貸し出す気にもなりません。しかし、私の教化的講話に関しては、例外としなければなりません。もし、恋は盲目にすることがある人にとって真であるというのなら、私は何もためらうべきではないでしょう。しかし残念なことに、まじめに言ってもふざけて言っても、恋は見えるようにすることということがまた真なのです。こうしてひとは、草が伸びてくるのを見たり、何もないところに美を見たり、そうでなければひとが信じ込まされえないようなところで経綸の指を見たり、しるしや驚くべきわざを見たり、掟や御心になかったことを見たり、変容する雲のなかに来たるべきものを見たり、存在していないのに、増量された度量衡のなかに今や存在するようになったものへの予感の錯覚を強めたり、礼賛のこだまだけからなる快い音を聞いたり、等々、等々したりするのです。というのも、ひとはすべてを見るからです。しかし、日曜日に生を受けた子にとって、どれほどこれらの幻視が魅了しうるものであったとしても、現実性の対象というものは、た

やすく、両義的でほとんど喜劇的な役割を演じることになるに至ります。あなたはもしかすると覚えているかもしれませんが、ヤコブ・ベームの目は、まず最初に、ピューター製の皿に反射した太陽光を観察して、三位一体の天の栄光を観想するために開かれたそうです。J・Bにとっては良くて、その皿にとってはなんと味気ないことか。皿がそのことについてけっして何も知ることがなかったのは幸運でした。

どうか、私があなたの言語学的研究を茶化しているなどと思わないでください。あたかも、私が微視的な観察に対していかなる共感もまったく持ち合わせていないかのように。また、私の教化的講話が、いま突然、それ自身不確かなものになったのだとも思わないでください。ましてや、あなたに喜んで本を貸すという私の気持ちについて言ったことが、空虚な礼儀であったなどと思わないでください。信じてください。もしあなたの手紙が、講話を借りたいという望みよりほかのことを含んでいなければ、もしその手紙が、いわば歯をむき出しにしていなければ、あるいは言語学的な機械をフルに稼働させていなければ、私はただちにあなたに送っていたでしょうから——私の唯一の本を。このような言い訳をしてもよいでしょうか。私の手元には、私が今でもよく見入る、唯一の本しか残っていないのです。

敬具

S. K.

(SKS 28, 335-336)